天眼鏡

実感した“コロナで園芸”

いよいよ本格的な春を迎えた。山梨での週末農業を初めて30年程になるが、年々、春は早まり、この原稿を書いている3月29日にはほぼ桜は満開、もう樹々には若芽も出始めている。温暖化を身をもって感じることは多く、農作業も前倒しがすすむ。これにコロナによる園芸ブームが加わって、ずいぶんと勝手が違ってきたというのが今回の話しだ。

筆者は竹藪を開墾した自らの10aほどの畑とあわせて、田舎家を借家して運営している「みんなの家・農土家（のどか）」にある3～5aほどの農地を管理している。春はまずジャガイモの植え付けから農作業を始めるが、例年、3月の最終の土日を基本に、農土香で「子どもの田舎体験教室」を開いて、東京の子どもたち2,30人が一泊二日で“田舎体験”する中で植え付け作業も行ってきた。ところが昨年の1月を最後に、コロナのために、この田舎体験教室を開けずにいる。密を避けることは勿論であるが、当方の主催により集会、それも泊りがけで実施することには責任をとり難い。次善の策として、親の責任で、何人かの親が子供といっしょに少グループで来る場合には対応するという形で、ジャガイモの植え付けやその収穫、ブドウの摘み取り等の節目に“ミニ田舎体験教室”を設けてきた。

話しの前提が長くなってしまったが、こうした形で今年は3月28日にジャガイモの植え付けを行ったのであるが、例年4月の頭まではホームセンターや直売所には種芋が置かれていることから、植付け一週間前の3月21日にこれを買いに出かけた。ところがである。近くのホームセンターや直売所を全部回ってみても、いずれも1週間前には種芋の置き場は撤去してしまった、とのこと。ホームセンターの話では、早めに種芋の購入・手配をする人が増えたため、とのこと。地元での調達は無理と見切りをつけ、ネットで検索して、結果的に青森県から宅配で取り寄せて間に合わせた。こうしてジャガイモの植え付けは無事に済ませたのであるが、作業を終えて昼食をとりながらの一人のお母さんの話。そのお母さんは病院にお勤めしているが、家は農家で、ご主人が専業で野菜作りをしており、ジャガイモは自家用分だけ生産しているとか。そのご主人が東京の近所の農家でも種芋を確保できなくて困っていると話していたとのこと。そしてその原因は一般家庭による購入が増えているため、ということらしい。コロナで外出できずに巣籠を余儀なくされる中、庭の片隅を使ったりプランターでジャガイモを栽培する人たちがけっこういるということのようだ。

どうも話を総合してみると、東京をはじめとする首都圏、大都市で、コロナで鬱々としている中、身近で自然に触れて体を動かし、気分転換も兼ねて野菜作りを始める人がけっこう増えているらしい。種芋の急激な需要増加に供給が追い付かないため、近県にまだ残っている種芋を引き払って首都圏の売り場にシフトさせている構図が浮かび上がってくる。言い換えればコロナで会議がZOOMにシフトしたり、飲食店での飲食から家庭での飲食へのシフト等、変化したことは多いが、その一つに園芸ブームも着実に広がっているということのようだ。

ロシアでは「ダーチャ」とよばれる600㎡ほどの寝泊まりできる小屋付き農地を都市住民の多くは保有しており、週末はダーチャで過ごす。また食料の自給や安全保障にも大きな役割を発揮している。こうしたことは農地所有が厳格な日本では望むべくもないが、国民が少しでも土に触れて農業を楽しみ、子どもたちも日常的に農園の中で様々な体験を重ねることができるようにしたいものだ。with コロナ時代に国民皆農が大きく前進することを期待している。

（農的社会デザイン研究所　代表　蔦谷栄一）